

ほうけ者の親玉、子玉、孫玉各位

1

ここで若干弁明しておく、私の山岸像は、いわば当人の人間と思想の浪漫的志向に全面的におんぶして描いているのである。

福翁によれば、「空想は即ち実行の原素にして、人間社会の進歩は都て空より実を生じたるものなり……文明の学者として世に処するの法は常に凡俗の思ひ到らざる所に心を馳せて種々無量の想像を逞うし、百千の新案を案じて之を裡に貯へ機を見て言に発し又實際に実行する」(『福翁百話』)とあるが、山岸はまさに無量の想像の持ち主であり、百千の新案を案ずるアイデアの人であった。

あるいはまたその方法の基本的性格は、毛沢東に似ていて「戦略的には敵を軽視し、戦術的には重要視する」であった。目標においては夢想ともみえるほどに「大いに意気込み」(毛沢東)、その目標の達成においては克明細心な手段を考える。彼の異常ともみえる熱中癖はここから出てくるのである。その目標が夢想に近ければ近いほど、より狂おしくもすさまじい具現の道が要求されたのである。

そうした兇戯にもひとしい構想夢中にある山岸というものは、徹底した現実家リアリストというよりはむしろ浪漫の人であり、本性的には詩人的性格の持ち主だったともみられる。仮に真善美とあれば、山岸

は、その表現において真と哲学の人であったが、それを支える内実においては美と芸術の人であった。そんな山岸像に私は手もなく魅かされるのである。

大体私自身もそうなのであるが、人は自分の甲羅に似せてしか相手を判断しようとしなない。相手が自分の甲羅に似ていないとわかるや、忽ち神秘化し、教祖的存在に祀り上げるといふのも困りものだが、実際に超人的性格を持った人間というのも、この世には存在するものである。私はそれらのうちの一人として、やはり山岸巳代蔵を挙げたい。

かつて山岸と親しく接した人に、「山岸はどんな人でしたか？」と問うたところ、「話せば話すほどかえって人間が小そうなって……」と、殆ど何事も聞かせてもらえなかったことがあるが、その思想的徹底振り、人間洞察の鋭き深き、独特な技術・方法、超能力的資質、あるいは人間の魅力等々において、並大抵のものでなかった人である。そのことは本人自身の著作においてすら、よく顕わし得なかつた態のものである。

私はそうした実証を得るべく、数多くの関係者から生前の山岸を聴取し、文章を見せてもらったが、例えば、広島で半農半漁を営む東鶴次のノート（「月を眺めて」）によると、こんな記述もあった。

「日前の河井で食を山岸さん始め数人で一緒にしたことがあった。卵の料理が出ていた。皆んなしゃべりながら盛んに箸を動かしていた。私はずっとみていたら、隣りの河原のオンドリがコケコッコと鳴いたとたんに先生は自分の前の卵料理をサツと前につき出した。どうとう食はずじまいだつた。外の人は気に止めないようだったが、ふしんなのであとで聞いてみたら、オスの居る卵は有精卵で命があるので、ムザムザ殺すわけにはゆかない。農業養鶏は食卵養鶏で無精卵をせめて利用（たべる）させてもらうんだそうだ。だから孵化場から来たヒヨコの中にオスが居たら、孵卵場へその旨申し出

て、三十万円位で買い取ってもらうと、いわれたことがある。

鯉のオス、メスが小さい時にはわからなくて山岸先生に聞いたたら、弘志君に聞いてみると云われた。そのときあなたは数えの三つだった。オカアチャン、オトウチャンの区別位しかわからんのにどうしてわかるのだろうと釣竿を持ってあなたを背にして空の沼に釣りに行った。一匹釣ったら『ア、オカアチャン』というのでバケツに入れ、二匹目は『オトウチャン』というので別のバケツに入れ、五十匹ばかり釣って帰ってオトウチャンと云うたのう二十匹ばかり腹を切って見たら全部オス、オカアチャンと云うたのう三匹ばかり切った卵を持っていた。メス一匹の間違ひもなかった。

私の三十年の知識、経験はこの時見事に負けた。無心な童児の感應能力は偉大なものだとしみじみ感じ入った。それは今あれやこれやの雑念（カンネン）やらにジャマされて出て来ることが出来ないかも知れないが、やがてイツカは發揮出来ることは確信を持って云える。こんなのを伸ばして行くのも人の生涯にやってやりの有る仕事だろう」

別の箇所では東は、京都の三鈷寺でみんなが顔を洗っているのに、自分はノドをうるおしたただけで顔は洗わなかつたところ、山岸がそれを見て、「東さん、水の気持ちがあなたにはようわかるんだね。顔も洗わんでチョコッポツとしか使われないなんて、真似の出来んことだしネ」といったと書いている。本人は水を何も意識的に節約したわけでも何でも無いのに、山岸にそういわれてひどく感銘を受けたような書き振りである。

こうした特異中の特異な人格を持つ山岸であるが故に、心ある人は山岸に出会って忽ちその不可思議な魅力に捉えられた。むろんノートの東もそうだが、晩年の山岸の最も身近にあって立ち働いてきた中の一人である亀井正子によると、二十四年前、山岸と初めて対面して、一夜にして蒙を啓かれる

の感に打たれたということである。

「私は紀州和歌山の出ですが、昭和二十八年七月十八日有田川の堤防が切れて田畑が何百町歩となく冠水しました。私のところも水浸し、何も収入ないし、百羽養鶏始めてみたのですが、その三日後になまくら養鶏の会に誘われたんです。私は最初は断ったんですが、元小学校の先生に誘いを受けたもんですから半ば仕様ことなしに円満寺へ行っただけです。聴衆はあまり多うありませんでした。それでもみな鶏の話の聞きにやってきているのですが、初めてみる鶏の先生は青びょうたんみたいにやせていて、鶏の話は全然しよらんのです。精神的な話ばかりしよって——。

聞いている人はしまいに『そんな精神の話をしなくて養鶏の話をしなさい、養鶏の話をしなさい』と机を叩いて迫るのですが、先生はそれを聞いて『いや、これが養鶏の話ですがね』と、ちっとも相手にならず鶏の話をせんのです。それでみな次々に席を立てて帰り出し、十二、三人残りました。すると先生は壇上から降りてきて『おつきあい願えれば夜明しして話しても結構です』と、結句九人になつてしもうた。その中に私もいたんですが、夕食が終つて一息つくと、先生は初めて鶏の話を始め、餌の配合、餌箱の寸法、柱の高さ、止まり木の勾配、間隔等々事細かな点に至るまで一々詳しく教えていただきました。

話が終つたのは夜中の二時頃でした。それだけ詳しく話して、こちらが質問すると『あ、そうですか』というだけのせいのない返事が返ってくるだけでしたが、それでも何やら魅力あつて結局、朝の五時までつきあつてしもうたんです。一緒に行った人も帰りがけ、『何やら狐につままれた話やつたなあ、話はいっこにわからんし』というてました。私も同じ想いでいましたんですが……」

しかしこの亀井正子、明け方家に戻り、夫のつくった茶がゆをすすり、床につく前に会報二号「獣

性より人間性へ」を読んで、大変な衝撃を受けた。本人のことばを借りれば、一通り読み終つて、「青菜に塩」となった。同時にこの文章をものにした人物に思い至り、ど偉い先生に巡り会えたことを知った。

2

仮に山岸の生涯を時代区分するとすれば、大体、Ⅰ生誕—都市生活時代、Ⅱ婦郷—戦後百姓時代、Ⅲ台風—山岸会運動時代といった三区に分らうと思われるが、最後の運動時代がこれまた山岸の最燃焼時代であるが故に、さらに細かく再区分される。

精神的経緯とすれば昭和三十二年八月、福里ニワの登場をもって彼の心境は画然と変化させられてしまうのであり、そこに必然的に、(1)昭和二十五—三十二年、(2)昭和三十—三十六年の二期に大別されるが、社会的な側から眺めれば、(1)昭和二十五—二十八年の山岸養鶏の登場期、(2)昭和二十八—三十一年の山岸会創成期、(3)昭和三十—三十四年の特講、百万羽運動期、(4)昭和三十四—三十六年の山岸最晩年期の四期に分たれよう。

しかもこの区分にあつて、彼の人生は楽曲のごとく時間を経るごとに次第にクレシエンドされてゆくのであり、終章四期は、百万羽養鶏の創設あり、福里ニワとの壮絶な取組みあり、かの山岸会事件あり、一時潜行と徹底反省の機会ありといったふうで、まるで月毎に変転するがごとく目まぐるしい生活裡にある。結びには遂に、ニワとの浄福の時至るのエンディングを迎えるのである。

このあたかも活火山がおどろおどろしくもマグマを噴き上げたような十年間にあつて、見方によつ

ては、昭和二十八—三十年頃の山岸に一番清貧にして、個性的な充実感があつたように見受けられるだろう。そこには、発足期の生の真剣味（といつても彼独特のノンシャンなものであるが）といったものがあり、会活動の多忙の上に重なって、大水害による忽ちの経済的窮迫の中にある人間像というものを見ざるを得ないからである。山岸自身はこの期の状況を、

「体からのちがさよならしたら止めるとして、悠々と綴っていたが、粥ゆえの百姓、百姓ゆえの鶏と、ペンだこが歟だこと交替し、生れて初めての、あかぎれの手を見る詩人？ になつてるところへ、本会が産声を上げての、てんでこ舞いの今日です。こせがれ泣くし飯焦げるで、どっちつかずの昼夜なしには、頭がふらふらになりました」（『実態』）

と、例によってチョッピリ、カリカチュア風に述べているに過ぎないが、實際生活は会のために、一家破産状況にまで追い込まれていたのである。

自らも他所へ出かけるが、各地に山岸会の支部が出来てゆくにつれて、向島の方にも人が訪れる。それも月を追って、人数が増してくる。三十八年には暮れの十二月になつてもまだ刈り残しの田があつたというし、翌年には七月になつているのに一枚も田植がしてなく、急遽、会員たちの援助によつてようやく終えたとのことである。

「昨日も先生と共に朝餉を頂いていたら、『この茄子も勇造さんが植えられたものだね』と独言を洩らして居られましたが、近頃の事を申してみますと、山本さんが茄子や胡瓜を植えて下さったのを始めとし、枚方支部からは甘藷を植えて下さいました。それから七月に入りまして、他所は全部田植を終了されたにも拘らず、私の無力なため一枚の田も植える事が出来ず、『何うなされますのや』と先生にお尋ねすると、『狭い国の耕地を遊ばしておくことは誠に申訳ないが、私は病身でとても出来な

いし、みんな余り忙し過ぎてとても出来んし、放っておくより仕方がない』『それでは秋の供出は何うされるんですか』『米を買って出したらよい』『そのお金は何うなされますか』『田を売るより仕方がない』とのお答えで、先生の確固たる信念、御覚悟の程はよく解つて居りますが、それでも何とかしたいなあと思つておりました処へ、中村さんが御連絡下さつたので、五日には寝屋川支部、横大路、下鳥羽支部、山科支部……」（『会報』二号 西辻正彦「省己不善 而称人善」、当時山岸宅に寄食）

三日間連続各支部会員が弁当持参で駆けつけ、中にはオート三輪二台に馬と道具を乗せてやつてきた者もあり、殷賑談笑の裡に田植を終えてしまった。

こんなことから、むろん当時の妻の志づきも大変である。同じ文章の中で西辻は書いている。「山岸先生の、斯く超人的な御活動が出来得るのも、一重に奥さんの内助の御功勞にあります。家事万端と、息子さんの学業のお手伝いから、書簡返信は勿論、各雑誌の原稿の清書まで、全部受け持つて居られ、窮迫と労苦にたゆまず、病身な先生を輔けて、愚痴の一つも洩らさず、慈あり愛あり、貧にあつて歎かず、富貴に処して奢らずと云う、不動の信念に生きて居られる奥さんは、女丈夫ならずして、何と云わんやであります」

この山岸が住まいしていた京都市伏見区向島城内本丸の辺りは、五十三年正月、偶然付近の知人に所用あつて探索してみる事ができた。京阪電車宇治線に乗りかえて、宇治川畔の観月橋駅を下車、奈良方面に向かつて三百メートルあまり行き、さらに右手百メートル許り曲がったところというが、今は周辺の以前の島地は一面に住宅が建ち並び、旧屋辺を確かめることすらならなかった。

ただ家裏手に五反あまりの池があつたというから、ここぞと覚しき辺りで、付近の婦人に尋ねてみたら「あの駐車場がもと池だったと聞いています」ということなので、駐車場へ行ってみると、なる

ほどそこら一帯の地面^{じち}が下がって凹地になっている。見廻して「これじゃ水がつくはず」と思った。

というのは、昭和二十九年秋、台風十三号によって宇治川の堤防は大決壊、付近は大洪水の惨事に見舞われた。高地でも水がつくのには、こんな低地では、なおさらである。鳥も鶏舎もあらばこそ、みな水没してしまった。当時の模様を知っている藤田菊次郎によると、

「何しろ水の深いところでは二メートル余ありましたからね。低いところでも腰がついたです。それで水際^{みづぎ}の木には、上はへび、ねずみが同居しとるし、下はいなごがたくさん止まっとるんですよ。家の中にはむろん水浸し、床から一尺上まで水がついている。座敷の方に便所の汚物が流れ込んでいるものだから、それを家の中から掻い出していました。娘の映^{はな}さんが入口から四、五メートルのところの時計を落したというんですが、手でさぐろうにも届かない。足でまさぐっているうちにそれらしきものにさわったので引き揚げてみたら、やはり時計でした」

といった具合だったのである。

この大水害の中にあつて、萱のごとく強い山岸の稲が水中にすつくと立っていたのであるが、水没も長びくとやがて倒れてしまった。ということは、この年の収入が殆ど皆無ということである。それにも拘らず、水を引いた後も、自分が出かけて行く、人が訪ねてくるで変わりが無い。「ど偉い先生」と認めた亀井正子もその後、会の毎月の研鑽会にはきちんと出席し、やがて紀州から向島の先生宅までせつせと通うようになった。

亀井正子が初めて向島を訪れたのは三十一年の一月半ば、大津で教師の会があつて、その帰り、母と向島に寄つた。玄関口でポロボロのモンペを着て手拭をかけた奥さんを見かけたので、「亀井です」と名乗るや、二人は泣いて抱きあつた。それ以前に有田のみかんを一箱送つてあつたのだが、先生は

会つてその御礼をいうでもなく、「二度と泣かしてくれな」といわれたのには、却つてこちらが感激して胸がむせんでならなかつたという。山岸は「そのみかんの皮大事に干してありますよ」ともいつた。

三十年冬の山岸宅といえ、水害の後で大変な状況である。家の中は畳もなく、あちこちごぎが敷いてあるきり。以前には四畳半くらいの大ぶとんの上にヤグラごたつを置いて、一度に十人も十二人もぐるりに入つて寝られるようになつたさうであるが、まともなふとんもあらばこそ、綿が出てポロボロの、つぎも当てられぬようなふとんしかない。人数が多いと蚊帳をふとん代わりに敷いて寝ていた。

食いものにしてもむろんない。志づ子は屋敷に生えた代官草を刈つて夏干しし、それを夜明し研鑽の時に炊いて食べさせてくれたりした。三十年暮れには醤油どころか塩も買いかねるほどの窮乏に陥っているのである。

みるにみかねて農作業を手伝いにくるものやら、マキを運んでくるものやらいだが、大勢の訪問客で追いつくものではない。貧乏のるばかり。それでも山岸は一向に苦情を洩さないばかりか、人の窮状をみれば直ちに心が動き、手足が反応する。亀井が翌朝去る時には、「寒そうやから」とメリヤスのシャツの上下を与えて着せた。自分の飢や危険は一向に気にならないが、他人のそれには逸早く敏感に対応する。

その後亀井が春先に訪ねた折のことであるが、付近の女性がやってきて、山岸に、今自分が置かれている苦しさを訴えた。何でも主人が病に寝込んでいて働こうにも働けないし、収入もない。明日にも食べかねるという話であつた。その話を聞くと、山岸は自身明日は同じ身であるのに、「亀ちゃん、

すまんけどなあ、あの箱の中に二斗ほど米があるから、あれ一輪車に乗せて送って行ってあげてくれんか」といった。それで亀井は指示どおり一輪車に米を積んで、その女性の家まで運んだという。

そうした山岸の心の優しさは、特別のものである。一体に人間は知の人は情に乏しく、情の人は知に欠けるといった例が多いものであるが、山岸ばかりは、知と情を兼ね備えていた。そうした山岸の知と情の相関的な心的機構、いわば相反するものの同時存在理由そのものが探究に値しようが、ともかく知の徹底度と同程度に情もまた徹底していた。

これもその頃の話であるが、山岸を訪れた某が散髪をしたいというので、亀井が散髪屋へ案内していった。すると、床屋が散髪し終ってから「あんたらどこから来たの」というので、「私ら和歌山から山岸先生のところへ来た」というと、「あの人しぶちゃんやねエ」といった。不審に思っ「どうしてしぶちゃんやねエ」と聞くと、「あそここの家の屋根に止まっている雀を空気銃で打とうとすると、あの人打たんでくれといはった」ということである。

「あんな屋根に止まったり、倉にいる雀を打たつて益になりこそすれ害になるものではないが、打たんでくれというから、しぶちゃんだというのやろうが、はア、先生の気持ちが変わらんのかなアと思いました。せめてわが家に止まった雀は、空気銃なり、鉄砲なりむけんと気楽に遊ばせてやってほしいという先生の情深いお気持です。その気持がわからんもんで床屋のおじさんは先生のことを、しぶちゃん、いうんです」

他日、空気銃で撃たれた雀が落ちていたので解剖してみたら、腹の中に米を一杯食べていた。先生はそれを見て、「やれやれお前は腹が減っていなかったか、腹一杯食べていたか」とさも安心したように、志づ子に語っているのを聞いたこともあるという。

また向島の屋敷は広くて四反ほどもあったが、手入れがしてなく草だらけになっていた。その草むらの中で狐が子供を育てていた。そのことを知った山岸は、親狐が餌を探している間に子狐が殺されたら可哀相だと、毎晩、むすびをつくらせて、油揚げ、天ぶらを添えて、親が餌を取りに行かないで安心して子育てが出来るように何年も運びつづけた。

亀井の土地のみかん刈りの時に山岸がやってきて、教育委員の人にある話を聞いた。

それは某教師が無免許運転で、子供たちを乗せて校庭内をぐるぐる回っていたのであるが、乗っていた子供が運動場ばかりでなく、道を走ってくれというので、道路に出たことで問題になった。そんな不届き極まる教師は県外へ追放しろ、ということになった。この話を聞くと山岸は直ちに、「是非、その先生の名前を聞かせて欲しい。その先生が県外に行かなくとも、もっと素晴らしい先生になっていただくためにお会いしたい」といった。帰ってから同じ内容の手紙を書いた。

しかし、結局はその委員は名前を教えなかったもので、山岸の意図は実現しなかったが、これまた山岸の情の然らしむるところであったのは当然として、もう一つ山岸がこの不適合教師にこれほど反応を示したには知の問題があった。山岸からすれば、そのような子供の命ずるままに国の法規をやすやすと犯すような人間、無法者の実践者こそわが陣営の人なりと直感したのである。

似たような話に、不幸な少年たちへの呼びかけがあって、当時（昭和二九・六）大阪・天王寺に「太陽の家」という社会福祉施設があり、その一少年が南米ブラジル雄飛の夢破れて自殺したことがある。その記事が新聞紙上に報道されるや、山岸らはすぐに協議し、施設側に対応策の申し入れを行なっている。申し入れの結果については不明であるが、山岸とすれば、少年らと会って、「前途有為の少年たちよ、あなた方が真に活かされる天地がここにある」と述べたかったのであろう。

昭和二十八・七 いままでの会長を総務に改め、初代総務に藤田菊次郎氏（京都府乙訓郡向日町上植野）が就任しました。事務所は同氏宅に置き（軒先一坪程度のもの）、総務常任で専ら交渉応接其の他諸事務の処理一切に当たったのであります。

昭和二十九・二・十五 「山岸式養鶏法『農業養鶏編』前編」山岸巳著を名古屋市中島社より出版しました。

同年四・一 山岸会の運営に関する研鑽会を「五五会」と命会し、同年七月十五日山下照太郎氏方を会場として発足し、以後毎月五、十五、二十五日を定例日と定めて開催することになったのであります。

同年十・三 「山岸会全国大会」が大府枚方市川越小学校において開催されました。

同年十二・十五 五五会に始めて「ヤマギシズム社会の実態」「知的革命私案」「一卵革命を提唱す」の諸論文が筆者山岸巳代蔵より発表されました。翌十六日、乙訓郡長岡町の岡本俊輔氏方において、前記三論文を中心に徹夜研鑽。以後におけるこの種の会合を「幸福研鑽会」と称し、「専門研鑽会」と別箇に全国各地において開催した。

昭和三十・四・十 愛媛県松山市において四国大会開催。

同年八・十五 「山岸養鶏会」を山岸会の一部門として「山岸会養鶏部」と改称しました。

同年十・九 兵庫県明石小学校において「第二回山岸会全国大会」開催。

昭和三十一年・一・十二 「第一回特別講習研鑽会」（略称『特講』）を光明寺（京都府乙訓郡長岡町）において一週間に亘り開催。

（「山岸会の沿革」より抄録）

山岸会が発足して途端に忙殺されたのは、提案者の山岸巳代蔵ばかりではなかった。

初期には会本部の諸係役、地方会や支部の係の人々が物資的にも労力的にも、何一つの補償もなくただ働きしていたのである。農作業の多忙な時でも、時と場合を厭わず、自費で支部や地方会、本部のために働きつけ、そのために自家の経営が遅れ、家族や近親のものから猛反対や非難の声を浴びせかけられたこともしばしばであった。

何一つ補償のないただ働きをするなど、それだけ思想的熱意に燃えていたということであるが、むしろ反対に銭カネを無視したただ働きなればこそ、人々は献身的に働いたのである。山岸会は「ポロと水でただ働きのできる土よ来たれ！」と呼びかけているが、人は金が貰えるならば金にしばらくは、貰える金相当分しか働かない。それが初めからだ働きとなれば、金にしばらくは働けることなく、自由に思いきって働ける。活動家たちはいわば報酬のないありがたきの中で、夢中になって立ち働いていた。山岸も生計のため、会活動（会報の印刷費等）のため、一枚一枚田を失くしていった。

こうしたただ働きの成果があつて、会発足一年目の四月には、支部が各地に出来、発祥地の京都だけでなく、乙訓郡向日町、向島、右京、山科、鳥羽、醍醐、綴喜の木津、井出……と十支部も出来ていた。各支部は多いところでは五十名以上を擁し、地方会も兵庫、岐阜、大阪と出来つつあつた。

会が拡大されるにつれて、会運営が問題になり、「沿革」にもあるように、養鶏専門研として毎月十六日の定例会の他に、五の日に会運営研鑽会がもたれるようになった。だが会の急速な拡大の中に

あって、山岸の本心は多数を望んでいたわけではない。むしろ少数を望んでいた。そのことは会報創刊号（「本会の現状を検討しよう」）にも述べていて、結びとして「われ、ひとと共繁栄せん、に徹し、絶対怒りを知らぬ心の出来た、十人のメンバーの出現を期待します」と書いている。

「多数者ではなく少数者を」の意志は、山岸会発足以前においてもそうである。

特講などでは百人単位の人間が如何に紛糾しているようだが、「山岸さんが一言洩らすと、途端に水を打ったようにシーンと静まり返った」などという話を聞かされたことがあるが、講演会、しかも山岸養鶏が出来始めの時分の講演会は、順調には運ばれなかったようである。

昭和二十八年二月二日、京都市烏丸の民生会館で市の青年農業実績発表会が行われたことがあるが、この会の役員をしていた和田義一がゲスト講演者として山岸を引っ張り出した。その時の山岸の講演であるが、もともと聴衆は代表十人の順位発表に関心と興味を集中しているので、てんから話を聞こうとしない。代表の発表が終るや聴衆は、トイレに走るものあり、たばこに群れ立つものあり、談笑するものありで、会場がぎわめき通しである。

その中でも山岸は落ちついてポツポツ話し始めたものの、先の青年代表の演出もあり、はつらつとしているのに対し、こちらはひどく沈んで弱々しく女性的で、どうにも下手で見劣りがするのである。壇上間近に席をとる和田らは、その様子を見上げて気が気でない。結局、会衆の徹底的にゲストを無視した始めから終りまでの雑談と、時折の高笑い、会場を右往左往蠢動する喧騒の裡にあって講演は終了した。

こんな体験が何度か重なってか、山岸は、「私は話が下手で、その上わかりにくいことをいうので、今の人は仲々聞いてくれません。たった一人でもよい、本当に聴いてくれたら、それで大きなもうけ

ものだと思えます」と周囲の者に語っていた。

この多数よりは少数、即ち量よりも質の考え方はやはりアナキズムに合致している。

なぜなら歴史上独創的で、勇敢に実行し、新しい時代を拓り開いてゆくものは絶えず少数者にほかならず、その反対に多数者は常に畜群的で何の創造もなし得ず、ただ先駆者の後を従順についてゆくばかりだからである。のみならず団結した多数者は最も恐るべきで、彼らは、常に新しい真理の革新者、先駆者を弾劾し迫害して来た。そのために、ひたすら自己に忠実でありたいとする芸術的天才は、殆ど零落惨憺の生涯を送らざるを得ないのである。

そのことをロシア生れのアメリカ女流アナキスト、エンマ・ゴールドマンは『少数と多数』（伊藤野枝訳）の文章の中で、

「群衆の欲求するものは見世物である」

「個人的先駆者の力によらなければ、かのフランス革命の巨濤も遂にその根底から震撼させることはできなかったであろう」

「少数者は常に偉大な思想と自由の旗幟を真つ先に翻えすのである。鉛のように縛られたる群衆は何事もなし得ない」

「私はただ善の創造力を欠いているが故に、群衆を唾棄するのである」

と、口を極めて独創と個人と自由の絶滅者である多数者を批判し、聡明にして妥協せざる勇者としての少数者を賞讃しているのであるが、究極的には山岸も同じ思いであった。詩人エマーソンとともに、「私は群衆に対して譲歩すべき何ものも持っていない。私は彼らを訓練し分離させて、優秀なる個人を選抜しようと欲するばかりである」と叫びたいのが本音であったと推される。

十人のメンバーを探し求めていたのも、この線に沿ってである。それは無きに等しい「優秀なる個人」をこそ——。世に命がけでやる十人の革命家さえあれば、世界の顛覆ぐらい造作もないことである——と。

後に山岸は同行者であるはずの山岸会の活動家たちに対して、「何もわけのわかっているウソウソムゾウどもが……」といういい方をしていたそうであるが、こうした考え方が現実には下降した場合には、再び愚かな形に通俗化されて、「天才崇拜」と「大衆蔑視」の思想にすり変えられ、独裁的指導者と奴隷的盲従者を生み出しかねないのであるが、それはそれとして山岸は「優秀なる個人」を択び出すべく、彼独特のやり方をもってした。

それが最初に亀井正子がぶつかった「徹夜研鑽会」であって、山岸は講演会に招かれても群衆を相手にしているわけではないので、例え鶏の話しようとして、聴衆みんなに聞いてもらおうと思つてやっているわけではない。自分の話を聞いてくれる人へのみ、語っているのである。そして話を聞いてくれる人がさらに詳細に知りたいとあれば、少部分ずつ小出しにして教えていった。

藤田らが向島の山岸宅に一冬何十回となく通つたというのもそれで、例えば鶏舎を建てるために釘を打つが、釘の打ち方だけにでも延々三十分も正しい釘の打ち方を説明するのだそうである。これでは山岸養鶏全部を知るために、何百回となく通わざるを得ないことになる。また五人のグループがあれば、五人のそれぞれに異つた部分を教授し、教授された五人がのちほど寄り集まって教え合えば、全体がわかるというようなやり方とどつた。

山岸がなぜこんな面倒な考え方をしたのか、それは本人にいわせれば、技術が私有化されて悪用されないためであるといっている。自分とすれば私人の私を滅ぼし、公人の私を興すべく考えているの

に、技術が私人の私に所有化されてはたまらない。いや、山岸養鶏なるものは私人の私があつてできるものではなく、公人の私にして初めてマスターし得るもの、という深い考えあつたことでもあつた。そうした思想的なことを抜きにしても、技術を小出しにすることにより、人は山岸に魅きつけられざるを得なくなる。この辺の人の心を読んだ山岸のやり方というのは、実に策士的である。

山岸会の講演会も、半ば必然的で半ば意識的ではあるが、要するに人の関心を呼ぶ鶏の儲け話で釣つておいて、彼は会の拡大に利用したという次第である。(三十二年十一月三日に「健康大学講座」が開かれているが、同じ趣旨によるものであろう) しかもごく初期は鶏の話だけであるが、やがて鶏の話を終つて精神の話をするようになり、それも後にはひっくり返つて最初に精神の話だけして鶏の話をしてない。鶏の話は聴衆の大半が腹をたてて帰つてしまつた後の少数の居残り組だけに、夕食を終えてから、じっくり詳細に夜を徹して教えた。

この段階にぶつかつたのが亀井らであるが、前述したように「徹夜研鑽」(「夜明し研鑽」)というのは非常に効果があつた。山岸は「これこそ会の精神的主導力となるもので、二回ほど夜明し会に出られますと、大抵の人に会の真目的の一端が会得して頂けます。歴史は夜創られるとは真当です」(「会の性格と運営について」と、実体験上の自信をもって書いている)。

しかしこの段階を過ぎると、最初から終いまで鶏の話をしないうで精神の話だけするようになる。聴衆が机を叩いて、ペテンだといおうと何といおうと構わないのである。ひたすら、自己の目指す少数者のみ求めて、講演行脚して歩いた。山岸自身、その頃にはもう心理的に「風雲急を告げ」、とてもまだるっこくて鶏の話なんぞしていられたのであつたのである。

そうした時期の山岸が会員の明田正一(故人)に当てた便りがあるので、転載しておこう。

通信1 (三十年六月八日付)

前略 過日は五五会で忙しくしてしまいましたので、お話も出来ず残念でした。八木の支部にもそんな変り者が居たという事は知らなかった。変り者を探している。変り者を探し合って、変り者でない人を変り者にしようじゃありませんか。そして世界中の人皆変り者に変えましょう。変り者を十六日に送って下さい。昼は向日町で養鶏。夜は当向島で変り者の変った会をやりませう。

通信2 (三十年八月十四日付)

あなたの業跡は全人に幸せを齎すものです。諸畑の革命は世界革命への第一発であり、これが決して誇張した言葉でなかったことを後日事実をもって証明するでしょう。

如何に叫んだところで、行う人が無かったならば、言わざるに如かず。

みんなで研鑽した理論が空論でなかった事にする手始めは、舞台一ぱいに踊るあなた方の、演出実技に俟ったもので、作者と役者と一体になって、出来るか出来ないか、世界の観衆の前で試演しましょう。熱演しましょう。あなたと私の繋がる全世界の人、その子孫永久の幸せのために、全力を傾けましょう。

十六日昼は、京都府乙訓郡向日町上植野公会堂 養鶏専門研鑽会

〃 夜は京都市東山区山科小野 〓 京都三条駅より醍醐行バスに乗車小野下車 (最終午後七時頃と記憶します)

元共産党 山本康夫氏方 (今はほうけ者)

幸福研鑽会 (実は世界顛覆相談会・変り者狂人・化者会) 山岸 巳

ほうけ者の親玉・子玉・孫玉各位

酒天童子の世界相手の暴れ振りに期待しつつ

通信3 (三十年九月五日付)

一徹者の久夫さん、おばあちゃんの言い分を聞きましよう。光線治療器使ってみて下さい。

竹井さんの「子供を戦争にやる代りに、この運動に捧げよう」に頭が下りました。親を、夫を、子等を戦争から護りましよう。前に気付かせて頂いた御言葉共に忘れませぬ。酒井さん等軽口取消しませぬ。厳肅な気持でやります。マサオちゃんは親勝りですよ。穴・水溜・火其他アブナイアブナイ。堰・堤 (大小共) へは親が付いても絶対やれませぬ。母ちゃんたのむ。

思わぬ困難が次々と襲来するであろう。心に熱情を燃やし、思考は冷静に、飽迄知的に態度は謙虚、温和で、対立にならぬよう、慎重に事を処しましよう。世界中皆一つです。先ず自家と、諸畑を固めて立証し、世界中の人皆子々孫々、永久に変わりなく幸福に暮らせるよう尽しましよう。

この運動が必ず成就することは当然です。一丸となってやり遂げましよう。
恵二様はじめ皆々様によろしく。

諸畑の皆様 山岸 巳

これら通信の期間に、賢婦人の評判高く、真宗の熱心な信徒であった山岸の母親が病の床にいた。八月に入って危篤状態となる。しかし山岸は「死にそうになっていて人に会いにいても仕様ない。生きていてる人の方が大事や。母はその事を知っていてくれると思う……」と見舞いには行かなかった。やがて昇天するや、葬式に行つて、参集者に自分の書いたパンフレット「二つの幸福——真の幸福と幸福感」を一部ずつ配つて香典返しとした。